

## [巻頭言]

## 学会誌 10 周年によせて

神沼 靖子

最近、気になることの一つにオープンデータへの信頼性とアクセス環境の安全性への過信がある。情報・通信技術 (ICT) は確かに進化した。しかし、エンドユーザからはサイト情報の真偽を確かめることなく、不安を抱くこともなく利用しているという話を聞く。現実的には、確かめる術もないのであろうが・・・。

ネットワーク環境のトラブルや犯罪のニュースを耳にする度に、「情報システムは人々の生活に何を齎したのか？」について省みる必要性をしばしば感じる。同時に、人間中心の情報システムがどうあるべきか、ネット社会における倫理の問題を含めて、学会誌 10 周年の機会に少し振り返ってみたい。

そこで、今日の情報システムに繋がる過去からの学び～学会誌誕生から 10 年～人間中心の情報システムに向けた課題に焦点をあてることとしたい。

**20 年前の教訓 “災害時の情報システム”**

今年には阪神・淡路大震災から 20 年ということで、復興に関する報道に耳目を傾ける機会が多々あった。箱モノ的な感覚での復興と人間活動の観点での復興とのギャップが感じられ、あらためて人間中心システムとは何かを振りかえることができた。

この大震災の直後 (1995.2.23) に、「災害と情報システム」というタイトルで災害時システムのありかたに関する座談会が開かれた。収録

内容は、災害と情報システム (bit, Vol.27, No.6, pp.26-43, 1995.6) というタイトルで公開された。

発案は浦昭二先生で、産と官の災害システムに関わりの深い専門家や、大学等の情報システム研究者が招集された。この座談会では、災害時に活用したい情報システムとその開発方針などが主な話題となった。たとえば、

- ・ 受信したい情報は時間経過とともに変わる！
- ・ 安全にはお金をかける！
- ・ エキスパートに生きた情報を！
- ・ 情報システムの構築は経験の積み重ねである！
- ・ 行政にはインフラ整備を！
- ・ 非常時にだけ動くシステムは意味がない！
- ・ 苦勞の割に日の目を見ない危機管理システムの構築！

などが取り上げられた。

今でも鮮明に思い出されるのは、神戸市の中心地で災害に遭った辻新六先生 (司会者) による「母親の過去の体験がとっさの避難行動に適切に活かされた」という体験談であった。

20 年前に語り合った災害時情報システムのあり方は、その後の新潟中越沖地震、東日本大震災においても共感された人間の情報行動の本質に関する内容である。それは、大災害が教えてくれた知恵でもあった。

今日との違いは何かというと技術環境の変化だけかも知れない。それは正に、普遍的な人間指向の情報システムである。20 年を経た災害情報システム環境には、多様なネットワーク

---

Yasuko Kaminuma

情報システム学会誌 (JISSJ) 編集委員

[巻頭言] 2015 年 2 月 13 日受付

© 情報システム学会

技術や携帯可能な機器の出現があり、ハードシステムの進化やアプリケーションの進化とともに、新たなグローバル技術などが常態化している。

## 学会誌の誕生

情報システム学会の設立が 2005 年 4 月 23 日で、それから 1 年後の 2006 年 3 月 30 日には情報システム学会誌 第 1 巻 第 1 号が発行された。

学会設立の前年に準備委員会が立ち上がり「人間中心の情報システム」や学会誌のあり方についての議論が繰り返された。2005.3.19 付けの「情報システム学会誌投稿規程(原案 Ver. 2005-03-19 版)」、2005.3.26 付けの「情報システム学会論文査読規定(原案 第 1.3 版)」が今も手元に残っている。そこには、「学会誌はオンラインジャーナルとして刊行する」ことも明記されているのである。

学会設立後の理事会でも、委員会や研究会に関する議論が続けられ、研究成果を公表する場について最優先に検討すべきであるとの方針が決まった。こうして、ジャーナル編集委員会が正式に発足し、初代編集委員長として山本喜一先生が就任された。速やかに編集に関する諸規定が制定され、情報システム学会誌は JISSJ (Journal of Information Systems Society of Japan) と呼ばれることになった。

## 学会誌発行 10 年の歩みと評価

「情報システム学を専門領域とする研究成果を公表する機会」と、「情報システム学会の社会的認知」とを旗印にして、編集委員会の活発な活動が始まった。そして、ジャーナル JISSJ の第 1 号には、たった 1 件ではあったが論文が採録された。

筆者も編集委員会のメンバーとして最初から関わってきた(途中、編集委員長(2代目)としての苦勞も体験した)。そんな訳で、この 10 年の歩みを振り返って自己評価せよとの役割がまわってきたのであろう。胸を張って「こんなに立派に成長しました」と云えるような成果ではないが、あらためて JISSJ に目を通し

て概観をまとめてみた。表 1 には、論文と一般記事を含むジャンルごとの掲載数のみを整理しておく。

ジャンルの枠組みとして、論文(論文、小論文、サーベイ論文、事例報告論文など)、解説(論説に近い文)、記事(ニュース、文献紹介、討論など)、講演(招待講演、特別講演などの録音記録など)、提言、およびその他(巻頭言、研究会報告など)がある。

巻(号)欄のカッコ内には発行された号数を記している。第 1 巻から第 3 巻までは、年 1 回の発行であり、第 4 巻から第 10 巻は年 2 回の発行であった(ただし、第 10 巻の第 2 号は本号に該当するため、表 1 はその掲載数を含んでいない)。

表 1 学会誌 10 年の歩み

巻(号)	ジャンル					
	論文	解説	記事	講演	提言	他
1(1)	1	2		1	1	3
2(1)		2		1	2	
3(1)	1	1				3
4(1・2)	6	2		2		3
5(1・2)	2	4	2	4		5
6(1・2)	2	6		7		2
7(1・2)		6		2		2
8(1・2)	1	3		4		2
9(1・2)	2	3		3		2
10(1)	2			4		6

論文を重視した学会誌であったが、表 1 のデータを集計すると、解説(29 件)、講演の記録(28 件)に比して、論文数(17 件)はかなり下回っていることが分かる。いわゆるジャーナルとしては、この状況は由々しきことである。論文の採択率は 3 割弱、しかも投稿数が 10 年間で 60 件余りという実績は聊か寂しい。編集委員会としてこの根源的な理由をしっかりと分析し、次の活動に反映しなければなるまい。

この 10 年間に、情報社会における人間活動の価値観の変化があり、情報システム環境の変化もあった。それでも欠番はなく、(遅々とした歩みではあったが)学会誌の発行は継続できた。教育や人材育成、研究活動の現場から得られた知が、論文や解説記事という形で学会誌に蓄積できたことを“好し”としたい。

## 来たる 10 年への課題

学会の顔ともいえる学会誌は、会員の研究成

果や実践的なプロジェクトへ取り組みの成果を発表する場である。同時に学会誌は、学会から社会に対する態度表明や提言の場でもある。

研究者にとっては、学会誌は業績評価のための重要な資産であるが、読者にとって JISSJ がどれだけ役立っているかという観点では如何だろうか。

他者から引用された JISSJ の文献は（他学会のジャーナルで参照されることも含めて）どのくらいあるのだろうか？ 今は殆ど目にすることはないが、次の 10 年間で JISSJ がどの程度参照されるようになったかのデータをサーベイしてみたいと思う。

近年、オープンデータ、オープンアクセスのサービスが常態化される時代になったが、当学会でもジャーナル発行時に掲載論文の目次やアブストを広報するサービスがあってもよいのではないだろうか。それが定期的に学会誌を覗きにいくきっかけになると嬉しい。

クラウドやビッグデータを扱う技術は進化し、科学技術研究に関する大量の文献情報が分野を超え組織を超えてリンクされる時代となった。公開された学術情報にどのような観点でリンクを張るのか、そこから得られる新たな知を如何に効果的に活用できるようにするのがこれからの課題となろう。

教育や人材育成の現場でもアクティブラーニング、MOOC などのようなオープン教育、オープン教材への注目が高まっている。ビジネスと IT を融合するカリキュラムでもイノベーションの項目が注目されている。このような多様化の中で、ビッグデータがますます巨大化する

ことは目に見えているとして新たな扱い方の模索も始まっている。

分野を超えた“ものづくり”では新たな発想を産み出す実践的教育や総合的な教育が重視されるとともに、技術が生まれた歴史的な背景に関する学びの場についても分野を超えた情報資源が注目されるようになってきた。

ICT を活用する情報システムの利便性が高まる一方には、新たなネットワーク犯罪などの負の資産もあり、地球規模でのリスクに対応する必要性が問われている。さらに、次世代技術の担い手を育成するために、未知なる問題の発見力と問題解決力が重視されている。

新たな 10 年は課題が山積みである。それは学会誌の内容にも多大な影響を及ぼすことになろう。

若い研究者たちの新鮮なアイデアと有用な成果で、この学会誌が埋められることを期待したい。

## 著者略歴

1961 年東京理科大学理学部数学科卒。日本鋼管にて造船設計システムの開発に従事。1963 年横浜国立大学助手、埼玉大学、帝京技術科学大学を経て、1997 年前橋工科大学教授、2003 年 3 月に定年退職。その後、埼玉大学大学院文化科学研究科博士課程ほかで客員講師。1999 年学術博士。情報処理学会フェロー。

情報システム学会発足と同時に学会誌編集委員（第 3 巻・第 4 巻時代の編集委員長）、現在に至る。